

ふるさとに学び、ふるさとを愛する個を育てる社会科学習

～自らがつむぐ学び方の工夫を通して～

梶本 久子

子どもたちがふるさとを愛し、自分たちの地域へのこだわりをもつこと。そして、考える力を作るために個を育てることが重要であること。この二つを実現するために、地域と個を連携した教育を中心に実施することを社会科指導の指針としている。本実践ではこの指針に基づき、子どもたちが、自治体、大学、企業やNPO等の地域のさまざまな人と交流を通じて、豊かで多様な学習をできるようにすることで、社会で起こっているさまざまな事象を考えるきっかけを作ることを学習手法の中心にとらえ、2年間にわたり子どもたちの成長を図ることを目的としている。本実践の目的を達成するためには、ふるさとに学び、地域と連携した教育を実践していかなくてはならない。その基本となる教材は、ふるさとから見出ししていくことが必要である。そこで、本研究を2年にわたって実施した。その結果、地域の連携を効果的な場面で取り入れた学習手法を構成することで多様な集団・組織の中でのコミュニケーションや豊かな人間関係を築き、成長を果たしていく個、子ども自らがつむぎ、ふるさとに学ぶ個を育むことができた。

キーワード：学習手法、ストーリー性、リフレクション、パーソナルヒストリー、地域教育力、主人公意識

1. 研究目的

本研究で目指す子どもの姿

本研究では、子どもが経験によって気付くことから、主体的に取り組み、自らの学びをつむいでいく子の姿を目指す。このことを社会科教育の中に位置づけ、学ぶことの意義や有用性を実感させる学習手法を考えていく。学習手法とは、学び方の手立てと考える。子どもたちの成長の確認として、繰り返し同じ学習手法を使うことで成長の度合いが図ることができるのではないだろうか。

本研究の学習手法として三つの視点を示す。

- ① 経験を繰り返すことによって自己の気づきを実感させる。
- ② ストーリー性のある単元計画を行う。
- ③ 魅力的な地域教材と出合わせる。

そこで、本研究での仮説を次のように考え、どのようにして向かっていけばよいかについて、実践を主として検証していく。

同じ学習手法を行うことによって、気づきが生まれ、パーソナルヒストリーをつむいでいく子が育つのではないかと。

1. 1 つなぐ・つむぐ・高め合う教育

一昨年の研究、「ふるさと（地域）に学び、ふるさとを愛する個が育つ社会科学習～つなぐ・つむぐ・高め合う防災教育の研究を通して～」(2012 本校紀要)では、地域とつなぎ、異学年交流で考えをつむいでいくことにより、高め合う子どもたちの姿を目指し研究した。研究を行う中で、以前、担任した高学年の子どもと当時担任していた中学年の子どもの異学年交流で、

1年間という短い期間の教育ではできない学びの連続性、持続性を感じた。そして、高学年に学び、学校内外の多くの人に伝える交流に大きな成果がみられた。

そこには、同じ学習手法で学んだ子どもたちどうしの高め合いを感じた。

今年度、中学年だった子どもたちを再び担任することとなり、同じ学習手法を使うことで、経験から気づきがうまれると考えた。

1. 2 地域教材活用の有効性

地域に学ぶとは、教材との出合いを地域にかかわることから見つけ出し、地域の「ひと・もの・こと」とのふれあいの中で社会的事象を考えるきっかけをもたせることだと考える。これからの社会は市民がこれまで以上に主体的に参画することが求められている。そのためには、地域との主体的なかわりをもとうとする子どもを育てることが必要である。

ふるさと和歌山にこだわり地域に学ぶ理由は、子どもたちが心のふるさととして、自分たちの生活する地域やまちなどを大切にすることを育てたいと考えたからだ。また、子ども自身が地域社会の中でさまざまな実情に目を向け、そこに暮らす人々との直接的なかわりをもつ中で、学び、自らの思いや願いを表現し、問い続ける主体的な活動が、地域社会に強い愛情や誇りをもつことにつながると考えている。そこで、毎年、年間を通し、常に「和歌山」のことを意識しながら学ぶことにしている。そして地域の多くの教材と出合い、県庁、市役所、NPO、今年度は農業・水産業・林業に携わる方などそれぞれの教材に関わる方々からの聞き取り調査をしている。和歌山(地域)へ働きかけ地域を豊かに創っていくことで、

地域を愛し誇りをもつ個に育てていきたいと考えているからである。

地域教材活用の有効性を、以下の4点でとらえた。

- ①子どもたちにとって身近であり、親近感をもち、その中で生活することのよさを感じることができる。
- ②見学や調査を通して直接の経験による実感を伴った認識が可能であり、様々な人と出会い、資料や情報を収集するなど、多様性をもって地域の教育資源を活用することができる。
- ③実生活にとって切実感がある体験や知識を生かした思考・判断の場面を設定することができる。
- ④地域社会への愛着を育成でき、地域社会の一員としての自覚を高め、地域社会の発展を願う気持ちを培うことができる。

これら4点が、地域に学ぶことの有効性であり、これらの条件を満たす「ふるさと和歌山PRプロジェクト」を1年間の学習の柱として計画した。

「ふるさと和歌山PRプロジェクト」として、和歌山県の産業を中心に仕事にこだわりをもった方と出会わせた。効果的な出会いが、ストーリー性をもった学習に大きなキープポイントとなるのである。そして、子どもたちが学んだことを発信・PRしていくことで社会に対する見方・考え方を確かにし、意欲的に追究することができるのではないかと考えた。

また、本実践を続けていくことで子どもたちは一面的・主観的な見方、考え方から、多面的・客観的に深化していった。その中でも特に有効性を感じた②の“地域教育力活用”について、食料生産の学習を中心に詳しく述べたい。

2. 研究方法

どの単元でも、教材との出会いを大切にし、子どもたちが抱いた疑問や発見から生まれた問題を取り上げている。5年生になり、中学年の地域学習から、日本の産業が学習の中心になったことで、切実感も出にくく、子どもたちからも難しくなったと声が上がっていた。そこで、資料に慣れるためにも、1学期から教科書で根拠を見つけ、常に和歌山と比べていく作業をするように支援をした。加えて、多くの地域の方から教わる今まで知らなかった事実と次々と出合わせることで驚きやハテナを呼び起こし、学習課題を追究していくエネルギーにした。

こういった出会いの一つ一つが、人々の願いや工夫を知るきっかけになり、その思いに応えようと子どもたちも、追究姿勢に深まりが出て、学び合うことができた。出合った一つ一つの教育力をつなぎ、つむぐことが、本校の研究テーマである「学びをデザインする子どもたち」を育むこととなると考えた。

2. 1 「つなぐ」

2. 1. 1 「つなぐ」 地域交流

研究テーマ「授業をデザインする子どもたち」とは、ひとり学習と全体学習が相互に関連しながら、さらに深めていくことだと考える。しかし、ひとり学習では調べ学習に慣れていない子はPCで調べるだけで満足し、調べたことをもとに考えることができない場合が多い。そこで、年間を通して、地域素材の活用や生の声を聞き取る活動を大切にしたい。子どもたちが自分とのかかわりから事象がとらえられるようにすることで、自分の考えをより深めることができる。

今年度、食料生産の学習は、子どもにとって抽象的なものになりやすい。それは、統計資料の活用を中心に学習を進めることが多く、実感を伴いにくいからである。1学期から、身近な地域教材で魅力的な人に出会わせることを大切にしてきた。子どもたちは5月の宿泊行事で勝浦のマグロ漁や串本町、K大のマグロ養殖について学んだ。日本の水産業は、周辺水域の資源環境悪化等による漁業生産・生産者の減少、高齢化の進展等国内外の状況が大きく変化している。水産業は、消費者への水産物の供給を安定させ、豊かな生活を支える産業であり、抱える問題は、消費者一人一人に大きな影響を与える。特に話題になっていたK大の「完全養殖」の視点から現在の水産業をみることは、日本だけでなく、世界のマグロ漁業に大きな変革をもたらす、資源保護を大きく促進させることができるのではないかとこの事実気付くと考えた。そこで、より身近に感じるため、長年、K大マグロの養殖に携わっている漁協のY組合長と触れあうことにした。

2学期になり、生活との関連をより具体的にイメージさせるために、校区内にある豆腐工場が、国産大豆値上げのため閉鎖したことを話題にした。子どもたちが3年生の時、工場見学や給食で大変お世話になった大好きな豆腐工場だったため、驚きやショックは大きかった。食料生産が自分たちの生活と密接に結びついていることをより強く意識することになった。同じ時期に、1学期からお世話になっている和歌山市卸売市場の青果業仲買人のKさんから「輸入が増え、市場に入っていない生産物が多くて困っている」という話を聞くことができた。そこで、1学期に学んだ農業(稲作)や水産業の学習をいかして、日本の食料生産の今後のあり方について具体的に考えさせた。

本実践を通していく中で、食料生産に関わる地域の方々には強い思いや願いをもって活動していることをとらえることができた。そして、子どもたちは地域の一員として積極的に自分たちで食料生産を守っていくことの大切さに気付いた。それぞれが生産者や販売者を何度も訪ね、交流し、多くのことを教えていただいた。

活動の中で、繰り返しコミュニケーションをとることにより、お互い親近感が増ただけでなく、早い時期から、地域の方々の思いや願いに気付くことができた。それが、学んだことや調べ学習、話し合いの結果を直接伝えたいという思いになり、劇化やポスター作

りなどの発信へとつながっていった。つまり、これからの農業や水産業のあり方について、自分自身の生活と結びつけ、食料生産の発展にはどうすればよいか考え、それを適切に表現する力も身につけることができたのである。単元の終末には、責任をもって学んだことを、発信するようにした。そのことにより、地域だけでなく、多くの和歌山の人が伝えたい使命感やこれからの生活に生かしていこうとする意識が育ち、学びを深めることができた。そこで、お互いが親近感を増すということだけでなく、自分の生活を振り返り、これからの生活に生かしていこうとする意識が育つのではないだろうか。

2. 1. 2 「つなぐ」 ストーリー

社会科では、切実感という言葉がよく使われる。しかし、どの子にも切実感をもたせることは難しい。そこでストーリー性のある単元計画を立てることで、切実感を使命感という思いにかえて意欲的に取り組むことができるのではないかと考えた。つまり、地域の方々の工夫や努力と自分たちの思いを重ねることで使命感をもち、地域と自分たちを自らの思いでつないでいけるのではないかと考えた。ここで、それを成果として実感できた実践を取り上げる。

本校は和歌山市を中心にあらゆる地域から通っており、地域の人たちとのつながりがほとんどない子もいる。そんな子どもたちにとって、身近な人々とかかわり合う力を身につけることは重要なことである。自分たちの地域社会の中で主体的に社会に参画できる力を育成するためにも、社会や社会事象に関わって学び合うことが必要である。

農業や水産業の学習は、スーパーの店頭に並べられている商品でしか触れる機会がない。本実践の中で、生産者の工夫や努力、流通の仕組み、生産者と消費者の結びつきについて学んでいくことは、自分たちの生活を支えているものを考えることであり、新鮮で有意義なものになる。近年、産地偽装問題や食中毒問題、TPP参加による輸入自由化、東日本大震災による産業の不振、食の安全性の疑問、世界の食糧問題など、農業や水産業の課題が明確になる事例が数多くある。しかし、それらは5年生として難解なものが多くクラス全員が課題意識をもって学んでいくことは難しい。そこで、等身大の5年生らしい思いを出し合えるように、こだわりをもった生産者、行政、店舗など様々な人と出会わせ、生の声を聞き取る活動を大切にすることで、自分の考えをより深めるようにしたいと考えた。その素地を育てる上で、農業や水産業が国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや自然環境と深い関わりをもって営まれていることを理解するだけではなく、よりよい農業や水産業のあり方、未来の食料生産について考えさせる場面を多くとった。

農林水産省は食料自給率を上げることを目標に「Food Action Nippon」という国民運

動を立ち上げている。未来の食料生産のためにできるところから行動していく姿勢は、今後とても重要となってくる。単元の終末には、「フードアクションワカヤマ宣言」をより多くの住民に向けて発信した。具体的には、和歌山市の中心部にある商店街で、不特定多数の地域住民に向けて、劇化やワークショップで食料生産の現状についての発信、市場の方とコラボして地域や校内で野菜販売とともに地産地消などの発信をした。第一次産業を視点に一人一人が地域の代表として主人公意識をもって調べ、自分たちの生活を見つめ直すきっかけをつくった。実際多くの人の思いを詳しく知ることにより、自分事としてとらえ始める姿が見えてきた。そして、その学びをより多くの人に伝えたいという強い思いに変わっていった。つまり、切実感が生まれにくい学習が、多くの人に現状を伝えなければいけない、大人の考えを変えたいという強い思いから使命感が生まれたのである。使命感をもって、様々な活動を進める中で自分たちの住んでいる地域への思いをより強くもち、自分の思いや考えを確実なものにすることができた。

2. 1. 3 「つなぐ」 地域への発信

子どもの考えは表現することによって、目に見える形となる。そうした表現方法や発信の場の充実や工夫が大切であると考えている。そして、子どもが自分だけでは思いつかなかった見方や考え方を発見できることが社会科の「考える面白さ」なのである。

自分の考えを発信することにより、考えを明確にすることができる。そして、友だちと相互に刺激し合う中で、自分の考えを修正したり、深化させたり、発展させたりしながら、共通点や相違点を探し、課題の共有化ができる。さらに、調べたことを発表した後に話し合いをすることにより、自分の考えをより深めることができる。また、話し合いの中で出てきた個々の課題を発表し合い、同じ内容毎に分類し、課題を確かめ合うことで、クラスの学習課題が考えやすくなり、調べる課題の必然性が明確になり、意欲的に調べ学習ができるようになって考えている。本実践でも、クラスで学習課題を考え、話し合い活動を行った。その授業の終わりには、問いに対する今の自分の考え、友だちの考え、それを確かめる方法を視点にして振り返り、交流する活動をつくった。そうすることで、次の調べ学習の目的や方法を明確に意識できるようにしたのである。

また、社会科と並行して、年に3回、総合的な学習で、校外で和歌山市の住民に食料自給率や地産地消の啓発をする活動を積極的に取り入れた。そうすることで、食料生産を視点に一人一人が地域の代表として調べ、自分たちの生活を見つめ直すきっかけをつくりたいと考えたからだ。また、地元企業や大学生とのコラボレーションのカフェ事業（カフェを大学生と一緒に企画運営し、校外の不特定多数の住民に学習を発信す

る場),さらに子どもたち自身が地域素材をもとに企画運営するカフェなどを中心に「ふるさと和歌山PRプロジェクト」の取り組みを校外で発信した。和歌山の食料生産の現状の資料やジオラマを用いてのプレゼンテーション、和歌山の農林水産業の施策の紹介、クイズ、劇化、地産地消グッズ作りなどワークショップ活動など様々な表現活動を行った。子どもたちにとって、より多くの人に伝える大きな原動力となった。多くの場や人の前でプレゼンテーションやワークショップなどの活動を繰り返し行うことによって、表現力、食料生産に対する意識の向上等、子どもたちの一昨年に比べ、大きな変容が見られた。

2. 2 「つむぐ」

2. 2. 1 「つむぐ」パーソナルヒストリー

出合った一つ一つの地域の教育力、自らの異学年交流による学びをつなぎ、つむいでいく。つまり、点から線、線から面、面から立体的につないでいくことが、思いを深め、思いをつむぐことになると、一昨年前の子どもたちの姿から考えていた。

今年度、学ぶことの原点に立ち返り、同じ学習手法を繰り返すことで、子どもたちが習熟からの応用をみせた。このように同じ学習手法をとり、点から輪にしていくことによって、一年間のみの成長を図るだけであつたことが、二年間という期間で検証した結果、子どもたちは発達の段階だけでなくアイデアの広がり、気付きが増え、メタ認知能力が高まった。さらに同じ学習手法をとっていない三分二の子どもたちへも、学びをつむぎ高め合っていく姿がみられた。

このことについては3. 授業の実践、4. 授業の考察の項で、3名の子どもたちを挙げ、詳しく述べたい。

2. 2. 2 「つむぐ」未来へ

社会科・総合的な学習のを通して地域の未来に対する強い思いを校内外の多くの人に発信した。地域住民、保護者対象のアンケートの結果、地域の多くの方々が、子どもたちの学習を高めてくれる貴重な指導者になってくれたことへの感謝や和歌山の食料生産よさや課題を発見したという意見をもらった。

また、地域住民からは「食料自給率をもっと勉強しなければいけないと思った」「子どもたちの強い思いが、自分たちも意識を高めなければ」という啓発につながった意見も多く寄せられた。

1年を通して多くの地域の方との交流や調査から、和歌山の食料生産の願いを実現していく地域の人々の工夫や努力について考える力が育った。また、発信という形で、学習に関わってくださった多くの方々を招待したりPRビデオで説明する機会をもったりしたことで、出合った一つ一つの地域の教育力をつなぎ地域DNAとしていくことの第一歩となったと感じた。

一昨年度と同様にアンケート、発信という形をとったが、今年度は、過去の実体験をさらに「つなぎ、つ

むぐ」ことによってより大きな成果になった。また、学校全体に広げていくことで食料生産の問題を問うこともできた。

社会科は子どもに生き方を考えさせる教科であると言われている。小学校学習指導要領総則では、「各教科などの指導に当たっては、児童が学習課題や活動を選択したり、自己の将来像考えたりする機会を設けるなど工夫すること」と書かれている。また、社会科の目標は「社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」とある。社会科は、一人一人の生活に密接に関連した教科であり、生涯にわたって学習していくものである。つまり、自らの将来の生き方について考えることが必要であることは明らかであり、これらの目標をふまえ、子どもたちは、出会った人の生き方と自らの生き方を比較し、社会の現実をふまえながら、自らの生き方を考える力を育むきっかけをつかむことができると考えた。

そして、子どもたちが今後も持続性のある学びを進めていくことで、意欲的に追究し、自分で問題を発見し、問題解決の過程でいきいきと学び合うことができると考えている。その追究姿勢を大切にすることで、さらに、自分を見つめなおし、未来への生き方へとつなげていける子になるだろう。

3. 授業実践

(これからの食料生産とわたしたち

～ふるさと和歌山PRプロジェクト～)

本実践は、学習指導要領の第5学年の目標(2)「我が国の産業の様子、産業と国民生活との関連について理解できるようにし、我が国の産業の発展や社会の情報化の進展に関心をもつようにする。」及び(3)「社会的事象を具体的に調査するとともに、地図や地球儀、統計などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、社会的事象の意味について考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。」を受け、内容(2)の(ア)「様々な食料生産が国民の食生活を支えていること、食料の中には外国から輸入しているものがあること」及び(イ)「我が国の主な食料生産物の分布や土地利用の特色など」、(ウ)「食糧生産に従事している人々の工夫や努力、生産地と消費地を結ぶ運輸などの働き」に基づいて設定したものである。本実践では、教材との出会いを大切にし、子どもたちが抱いた疑問や発見から生まれた問題を取り上げた。4月以降、和歌山の生産物にこだわり、多くの方と出会って聞き取り調査をした。和歌山の食料生産を通して、日本の農業や水産業が、食料の確保に重要な役割を果たしていること、それらが自然環境と深いかわりをもっており、生産者や流通業者の工夫や努力によって成り立っていることが理解することができた。そして、これ

からの農業や水産業のあり方について、自分自身の生活と結びつけて考え、食料生産の発展にはどうすればよいか考え、それを適切に表現する力も身に付いたのである。

3. 1. 単元目標

- 日本の農業や水産業の特色について関心をもち、これらの産業は国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや自然環境と深い関係性をもって営まれていることを理解し、国民の食生活を支える食料生産の発展を考えようとする。
- 日本の食料生産には、就業者数の減少、環境への影響、安全性、低自給率などの問題点があることを理解し、安心・安全な食料確保のための食料生産のあり方を考えようとする。
- 日本の食料生産の現状から学習課題を見出し解決するために、多くの人からの聞き取りや調べ学習を通して様々な考えやアイデアを出すことができる。

3. 2. 学びをデザインするために

身につけさせたい4つの力

本実践では、学びをデザインするもとなるものとして「つなぐ」をキーワードとして考えた。常に地域の人や和歌山と日本、産業と産業を「つなぐ」子どもたちを育てることにより、学びをデザインする姿が見られると考えている。食料生産にかかわる様々な方々の工夫や努力、思いを「つなぐ」ことを大切にしたい。そして、上記の目標をもとに本実践で学びをデザインするために身につけさせたい4つの力を挙げる。

- ① 自分の課題を進んで調べようとする力
自分が地域の代表であるという「主人公意識」をもつことで学習意欲が高まり進んで調べ学習をしたり、水産業にかかわる人の思いをインタビューしたりする学習に取り組むことができる子ども
 - ② 調べ活動の仕方（学び方）を学ぶ力
食料生産にかかわる人に、話を聞く活動、地域の人、家庭にインタビューする活動など、課題を追究するための体験活動を取り入れることで、課題解決のために、どんなことを調べたらよいか考える子ども
 - ③ 目的に応じた方法で分かったことをまとめる力
ICT機器を活用したり、相手を意識した話し方をしたりすることで、調べたことを分かりやすくまとめたり、発表したりする子ども
 - ④ いろいろな人とかわる力
まとめたことを話し合ったり、異学年や家族、地域の人に発信したりすることにより、新たな課題を見つけることができる子ども
- 次の「3. 3」「3. 4」では、特に①④について詳しく述べていく。

3. 3 学級風土づくり

3. 3. 1 育てたい力

同じ学習手法を行うために、まず基盤になるのは学級風土づくりである。子どもたちが「表現することが楽しい」「自信をもって話したい」を思う学級風土をつくるのが大切だと考える。違いを受け入れ、友だちのよさを知ることが必要であると考え、学校生活の大半を占める授業の場で“友だちの考えのよさ”を見つけることからスタートしている。今年度も、授業の終わりには振り返りをし、友だちの考えを再認識させる機会を多く持った。お互いの意見を認める考えのふくらみを毎日の学級便りで紹介したり、読んで聞かせたりする中で、安心して自分を表現する楽しさを味わえるようになってきた子どもが増えてきた。そこで「一人一人がのびのびと自分らしさを出し輝いてほしい」と呼びかけた。その一つ目の願いのもと学級づくりを始めた。

また、本学級の子どもたちは社会科の学習に意欲的で、興味・関心をもって取り組む子どもが多い。一昨年から、楽しみながら調べ学習をし、朝の会では、調べたことを話したり、新たな発見をしたりしていた。しかし、自分の考えに自信をもって話せる子やつながりをもって話せる子が大変少なく、疑問や問題点を感じても、追究したり、切実感をもって自ら課題を見つけて活動したりする力も弱い。一見、活発に話し合っているようだが、お互いの意見を聞き合い、考えを深め合う対話授業までは至らないことが多い。そこで、子どもたちの思いを大切に調べ学習や話し合いをすすめていきたいと思った。そして、今後、対話型学習をすすめていく中で、自分たちの考えの根拠を確かめていく楽しさや友だちと意見を練り上げ深めていく面白さを感じさせていくことにした。

そこで、「表面的にとらえて満足せずにものごとに最後まで取り組んでいく粘り強さをもってほしい。」という二つ目の願いをもち、これら2つを『育てたい力』とすることにした。

3. 3. 2 めざす学級風土に向かって

3. 3. 1の2つの『育てたい力』のために下記のことに重点をおいて取り組んだ。

・表現力をつけるために

話し合いの原点である朝の会の時間を「聞き合い学び合える場」として大切にしている。話をしっかり聞く態度と発表の仕方を指導し、学び合う力を身に付けていく。また各教科でも「心に響いた意見」を中心に作文や振り返りカードを書き、お互いの意見を多く認める文章の紹介をしている。（発表カード、スピーチ、日記、近ごろ変わったことなど）、また、教室環境を工夫し、学習の足跡（掲示物）を使ったり、一人一人の立場表明（資料やアイデアの情報交換簡単に）をしやすくしたり支援することで、自分の思いを、堂々と話せる学級風土をつくっていった。

・個が生き、個が育つために

個が生き、個が育つためには、絶えず子ども一人一

人に目を配り、みとり、評価すること、そして、その評価に基づいて、その個をどう育てたらいいか明確な視点を持ち、具体的な姿を思い浮かべて個に応じた指導を繰り返す姿勢が重要である。「自分の考えを書いたり筋道立てて話したりするのがすごく苦手」と話すA児（3. 4. 1～かんと）に対しては、積極的に手を差し伸べ、A児のよさや思いをみとることで適切な支援をしていこうと心がけた。そして、A児が考えたものを資料として全体に提示し、「みんなの学習にいかされている」という自信をもてるようにした。また、個をみとることにより、A児に対しては、「家庭での多くの調べ学習を共に整理し、調べたことを簡潔に発言できるように場を設定する細かい支援が必要」という具体的な支援の方向性が見えてきた。個が生き、個が育つための土台は、子ども理解にあると改めて感じている。

・子どもの疑問が問いに変わるとき

一人一人の調べ学習の驚きや疑問をテーマごとに教室に常掲し、子どもたちがその中からさらに調べたり、意見交換しあったりする場を多く設定するようにした。自分の疑問や感想を一人一人発表し、全員の考えを知ることにより、自分の考えに責任をもつとともに意思表示できる喜びを感じることができると考えた。子どものこだわっている課題は、個々に違いがある。子どもの疑問を出し合うことで、矛盾する考えや不思議だなと思われることに気付く子がいる。その矛盾や気付きを取り上げ、話し合いを通してクラスの学習課題とした。個々の子どもたちの見方、考え方を生かした話し合い活動を位置づけることにより、子どもの疑問が淘汰され、問題意識がさらに醸成していくのではないかと考えた。

3. 4. 自らつむぐ姿

本実践では、同じ学習手法である経験をいかした学び、3. 2の④のいろいろな人とかかわり（つなぐ教育力を活用する力）により、自ら学びをつむいでできた場面が多くみられた。そこで、3人の子どもの3年生の姿と比較しながら作文を中心に3例を挙げる。

3. 4. 1 経験から振り返ることで変容する

～経験を繰り返すことによって自己の気付きを実感させる～

・経験から自らの考えをつむぐ

1学期から朝の会では水産業について関心が高く、話題に上ることも多かった。まず、3年生の時、お世話になった豆腐工場が国産大豆の高騰で工場を閉めることになったことを告げ「今日から、日本の農業と水産業について考えていくよ」と話すと、これから始まる学習への期待に胸を膨らませていた。しかし「輸入、食料生産、自給率って難しい言葉と言われるとよくわからないなあ」という意見も多く、口々に疑問を話し

ていた。そこで、まず自分たちの身近な食生活に目を向けさせ、食料生産に対して興味・関心を持ってもらいたいと考え、一週間のうち3日間を選んで、食事の材料はどこから来るのか調査を行うことにした。

調べた結果を報告する中で、家の人はなるべく和歌山産のものを選んで買っているということ、また、国産のものは日本各地から、そして世界中からやってきていることを知った。子どもたちの興味は外国産の食料の「安全性」に向けられていたが、さらにT P Pや貿易摩擦などについて調べていきたいと感じている子も見られた。マップ完成後、全員で比べてみて気付いた子とや疑問点、調べてみたいことを出し合った。全国とはいえ、やはり西日本から届いているものが多いこと、東北地方から食料が少ないこと、そこには大阪と東京の卸売市場が関係していること、北海道は遠くてもたくさんの食料が運ばれてくることなど、1学期の学習を振り返りながら話す子どもも多かった。食料ふるとマップ作りを通して子どもたちの食料産地に対する興味・関心が高まったようであった。

外国産のものは心配？安心？

国産と外国産は味もお金も違う。だからいっぱい教えてもらったS豆腐がなくなってすごく嫌な気持ちになった。でも、スーパーでも国産は高いけど値札にいろいろ書いていて安心して食べられる。外国産、日本産は安心だけど値段が高いので安い外国産を買うこともあると思う。それに日本で作られていないものは外国産でも買うので、お母さんは買い分けてるって言った。昨日、かまぼこを買いに行っただけで、国産の魚じゃない外国産の魚を使っているけど、おいしいH商店があるので、見学させて頼んできました。インタビューに行かせてください。（かんと）

かんとは、人と出会い関わるのが好きな子どもである。3年生の工場見学後もS豆腐のM社長のもとを訪れるなど、出会った人に対しての思い入れも強い。

家庭の協力もあり休日や放課後も意欲的に聞き取り調査を行っている。

3年生の「消防のしごと」の導入時は、

話し合い大好き。

サイコー、楽しくてうれしいよ。ぼくは夏休みに消防署の調べを頑張ったので自信があるんです。いろいろ行くのが楽しみです。（かんと 3年）

3年生の時は、保護者に手伝ってもらいながら、調べ学習を行い、聞き取り調査の楽しさを感じ始めていた。経験を積み重ねることにより、S豆腐の国産大豆、外国産、食料産地の学習をもとにして、H商店に材料の原産地を尋ね、見学の依頼をしてきた。出会った人から聞き取り、自分の課題解決に向かう学習手法を続けることで、自ら視点を絞り、「一番聞き取りたい人」を探そうとするようになったのである。

- ・なぜ国産ばかりなのか⇒国産は安心、外国は安心だ
という保証がないから。ニュースでも心配な記事が
多い。例えば…
 - ・地産地消をしたら⇒地元や国産のもので安心。続け
ていくと食料自給率があがる。資料のP16の…
 - ・すべて国産なのか⇒国内で作れないもの（バナナ・
えび・オレンジ・アボカド）外国産として買う。
教科書のP98 かぼちやの収穫量の資料の…
- この3つから考えたことは、国産のほうが安心だけ
ど、国産より外国産の方がいいものもあるから、そ
の時、その時で変えたらいいと思う。（はると）

一番は赤ちゃんが心配

火事になったときは、すぐに弟と2人で非常用持ち出し袋を持って、お母さんが妹（9か月）を抱っこして逃げる。でも、近くのガソリンスタンドがこわれたら絶対にマンションに燃え移るから心配だと思った。今日みんなと話をしているとうちで違っていたのは、消火器で消すという意見。絶対逃げなきゃダメだと思う。それと僕の家と学校もすごく近いけど、学校が火事になったらどうするのかもっと知りたくなった。（はると 3年）

はるとは、話し合いの際、根拠をもって話すことのよさに気付きをもった。導入時も時間がかかったが、一つ一つ丁寧に調べていく姿に変容を感じた。

ほとんど和歌山県産

お母さんは「なるべく地元でとれたものを優先して買うようにしている」と言っていたのでいろいろ見せてもらうと本当にありました。和歌山でとれたみかんを使って作ったジュース、インゲン、オクラ、紀美野町でとれた物、紀北産のものもあります。お母さんが買っている物の産地を見ていなくて、今気付くとこんなことを心掛けているんだということがわかってびっくりしました。

自分の県のものを買うことが安全・安心なんだな
 と思います。ぼくも大人になったらこのことを大切
 にしようと思っています。(りょうた)

今日から社会の授業が消防署になりました。ぼくの家が火事になったら、近くの消火器や消火栓から水を出して消します。そして、その場所から離れて119番通報をします。そして、近所の人が少しでも早く逃げられるように声をかけます。ぼくの家は近くに岡崎出張所があるので少し安全です。

最近意見も言えるようになってきたのもうれしいです。もっとがんばって意見を言わなくてはと思います。(りょうた 3年)

りょうたは、穏やかで常に周りの人を気遣えるである。このことは上記2つの作文にも表れている。5年になり「大人になったら」という言葉がよく出てくるようになった。これは、りょうたが3年生の3月、一年間学習したことを振り返った作文でも、その考えが見られるようになってきていた。そして、さらにこの

一年で未来の生き方を常に意識して学んでいく子に変容してきたと感じている。

ふるさと和歌山まちづくりプロジェクト

ぼくの家は、お母さんもお父さんも和歌山の人じゃありません。だからぼくもあまり和歌山のことを知らないし、学校が校区の学校じゃないから自分の地域のことに本当に知りません。でも、ぼくは4月から、和歌山の勉強をして、だんだん和歌山のことが好きになりました。福岡のおばあちゃんも、福岡に行ったときに和歌山のいろんな話をしたら、びっくりしています。それに、和歌山のことを知ったら福岡のことに興味が出ていっぱい調べることができました。

調べ学習が好きだけど、特に防災の勉強をして、その気持ちが強くなりました。Oさんや5年生のみんな、消防署のMさんなど、地震から守ろうとして、ふるさと和歌山を大切にしていることを知ったからです。とくに5年生のY君は「浜口梧陵さんになる」って勉強が終わった今でも、話しているのは感動しました。ぼくにできるかなって思うけど、これから、防災の勉強をしていない人に伝えていきたいです。そして、防災だけでなく、ぼくが調べた華岡青洲や南方熊楠のすごいこととかもこれからもずっと伝えていけるといいなと思います。

ここでいう「経験」を繰り返すとは、体験だけでなく、授業の展開が大きく占めていることがわかる。また、学び方として、調べ学習のことも挙げたい。

・調べ学習

子どもたちは、インタビュー、アンケート、グスティッチャーからの話などいろいろな方法で学習を進めることができ、意欲的に学習していた。ひとり学習が進むにつれ、自分の考えも変わってきている子どもも多く出てきた。どの子どもも自分の考えをしっかりとノートに書いていた。よりみんなと違う意見をと考える子が、PCで調べはじめ、話の内容が難しくなかななか絞り込むことができない子が出てきた。やはり、子どもたちに対する調べ学習の支援、具体的なひとり学習の時間がもう少し必要だと感じていた。5年生としては初歩的であったが、今回はいろんな人とかわかって聞き取り調査をしてほしかつたため、3年生の時と同じように原点に戻り、電話やFAX、インタビューアンケートの仕方についてガイドブックを作成した。まずは2人組で質問して自分の思いを伝え合う時間もとった。そのことによりあまり聞き取り調査が好きではない女子が意欲的に伝え合っている姿をみることができた。その後も、子どもたちは、ガイドブックを見て、聞き取り調査に行くことを楽しみにしていた。そこで、学校の近くの市場や食品工場、スーパーへ行く時間を取り、それぞれグループで調べ学習を行った。

今までわかりにくかった点も生の声を聞き取ること
で理解できたことも多く、その後、自ら下校途中や買

い物などで積極的に聞き取りをする子が増えてきた。そして、ひとり調べの時間には、PCや図書の本だけでなく先生方に聞き取りに行く子、生産者や店舗に電話をして調べる子、アンケートをとる子など調べ学習の仕方もバリエーションが出てきた。

いろんな人にインタビューして、それをまとめることにした。持って行った携帯端末機が役に立つと思う。だからいろいろまとめられる。国産は安心だけど、旬じゃないものやバナナとかアボカドとか買わなければいけないものあるから買い分けてくことが、大切なこと。それにオーグビーフみたいに安全って言われているもんが入ってきたらどうなると思う？安いし安心してなったら消費者は買うと思う。そしたら日本の生産者は困るから、プレミアム和歌山を増やすことで安全安心なこだわりのほんまもんを増やしていくのがいいけど、今は心配。心配だからこそ、有機や無農薬で頑張るGさんのような人をふやしていきたいといっていた。Oさんにインタビューしたら畑に貸してくれる制度をつかって跡継ぎじゃなく新規に農業をしてがんばっている。みんな「大丈夫、大丈夫」って言ってほっといたら大変なことになる。だから、ぼくらが本気になって頑張って説得する。3年のときみたいに。

(かんと)

インタビューでは、かんとが大好きな携帯端末機を使わせ、特に知りたい所を動画撮影させた。かんとにとって、戻って来たら何回も確認しながら対象と深くかかわることができ、振り返りや考えを書くときの参考になった。子どもたちが学習の中で自分の思いや考えを表現したくなる時、対象となるものやことに自分の思いが深まっていくことが重要であると考え。

調べ学習の新しいやり方大発見

どの人に聞いても後継者がいないという話になる。だからぼくは後継者が育つためにどうしているかを調べるんだけど、いい資料が見つからない。お母さんに聞いてみた。でもはっきり見えてこない。だからもう一回ノートを見直した。今までのノート。そしたら、いっぱい見つかった。なーんだと思った。跡継ぎって言ってもブランド化したら跡継ぎあった。しらすのYさんは、跡継ぎになったっていうた。第6次産業になっていて今注目の仕事。N社のGさんって工場野菜育てている。これからのスマート農業。そそれにKさんみたいにグループを作る。そして、そんなグループや会社に国が補助金を出してみんなで大切な問題にして協力するのがいいという考えになった。今までのノートに根拠があった。でも、JAのKさん言ったように、結局、大丈夫とか心配とかいうても、明日辞めようと思う農家や漁師さんもある。そしたら、何とか今の和歌山や日本の食料生産を変えていこうとする人や、工夫、国や県の取り組みがいると思う。それはぼくらが地域の人や生産者、消費者にみんなで協力してなんとかしなくてはという気持ちを伝えていくことが

大切だとわかったのはノートのおかげ。(はると)

やる気が上がる調べ学習

やり始めるまでは少し時間がかかります。そして、なかなか自分の考えにつなげられない。Kさんのところにもインタビューに行ったし、Gさんの家にまで行った。漁師さんにきいたら衰退していくと言われた。太刀魚はブランド品で輸出している。漁業より農業のほうがTPPは大変って言っていた。そんな農業で有機や無農薬にこだわっているGさんやKさんはJAを通してない。これから未来の農業は今まで通りにしていたら、絶対に心配。

元ちゃんは普通の農家の仕事は種をまいて育てて売るだけだけど、もっと面白いことをしていかなきゃいけないと思っている。ぼくもそう思った。このまま、95.5%の農家の人も考えをかせていかなきゃ心配。でも、いろんなことを調べていって、まとめていくことが少しずつ上手になってやる気もあがっている。(りょうた)

自分の調べ学習を、自然に、見直し、気付き、修正するというリフレクションを行うことができていた。

リフレクションを起こさせるためには、そのきっかけとなる「気付き」を起こさせることが重要であると考えている。これまでも自らの調べ学習について「気付き」を起こさせるために、普段の授業の様子をビデオカメラで記録し、記録物を見せ、気付きを促すなどの工夫をしてきた。当然ながらこうしたことは調べ学習の経験を十分に積んでいないことには不可能だと考えられる。そのため、何度も経験させることで、リフレクションの元になる「気付き」を起こさせる工夫が必要となると考えている

3. 4. 2 多くの人と関わって

～ストーリー性のある単元計画を行う

魅力的な地域教材と出合わせる～

自分たちの地域である和歌山県を扱うことで、子どもたちが食料生産を身近に感じることができた。魅力的な方々との出会いで、食料生産の学習に対する姿勢が変わってきた。実際に食料生産に携わっている人の生の声を聞くことは、自分たちの考えてきたことを確かめることのできる絶好の教材である。そこで、知りたいことをもとに学習問題を作り、今後の学習の計画を立てた。地域学習にはそれぞれの社会事象の関連付けや、社会認識を大きく変化させるような様々な意義がある。今回、水産業や農業で関わった中央卸売市場の方々、和歌山県の特産品担当者、生産者の方々との交流を振り返ることが、子どもたちにとってわかりやすく身近な問題になると感じた。また、1学期のK大マグロの完全養殖や企業とのコラボレーション、9月のN社工場見学の際、子会社の野菜工場の見学などから、未来の農業、水産業の企業化や機械化について考える子もいた。そこで、これまでの学習を生かして、日本の食料生産の今後のあり方について具体的に考え

させるようにしたいと思った。また、お世話になっている和歌山市卸売市場の青果業仲買人のKさんから「輸入が増え、市場に入ってこない生産物が多くて困っている」という話があり、「何とか市場のものを宣伝して市場を活気づけたいという子どもの意見も多数あった。そこで、市場の品物を宣伝するために、総合的な学習の時間を使って市場の野菜や水産物を仕入れ、学校で店を出すことにした。地域の方、保護者に発信するという思いをもって調べ学習に臨むことで子どもたちの意欲はさらに高まってきた。具体的にはハテナをもとに、自分たちの食べている食料品を大きく「米」「水産物」「野菜」「果物」「肉」の5つのグループに分けた。ひとり学習を充実させ、相互に刺激し合う中で、自分の考えを修正したり、深化させたりしながら共通点や相違点を探し、課題の共有化を図っていくことができた。

自ら学び、調べ、考える力などを育成するためには、1年間の中で、社会的事象を作業的・体験的な学習や問題解決学習等を通して、学び方を身につけるような学習の工夫を考えている。学び方とは、教科書や地図帳・資料集・パソコン・インタビュー活動等を活用し、情報収集する技能、表現する技能・話し合う技能などを高めることはもちろん、多面的・多角的に思考・判断するといった問題を解決していく筋道や思考の方法を学ばせていく「プロセス」を学ぶことでもあると考えている。

少しずつではあるが、話し合いが始まると、自分の意見の根拠として、教科書や資料集から考えを膨らませ、身近な教材を見つめなおす姿が見られるようになってきた。特にはると・りょうたには大きな変容が見られた。かんとは食料ふるさとマップと見比べながら、北海道や東北地方の食料自給率の高さに比べ、和歌山県の自給率が30%ある事実には驚いていた。「あかんやん。もっと何とかせな」と話すと「和歌山県は宣伝も下手ってきいたよ」「自分たちが思っているより大変なことかも?」と口々に話しだし、かんとを始め、数名の子が和歌山県の現状を本気で心配していた。

また、多くの子が輸入することが悪い、安全性が心配と考えて、資料を見て話し合う中で、アメリカやオーストラリアが少ない人手で大量の農産物を生産しているから安い値段で提供できていること、日本では生産が難しいもの(バナナ・パイナップル等)があること、旬以外の時期にもほしい消費者の願いについても気付く子が出てきた。そして、工業の学習で日本の輸出についても思い出す子やN鋼機のGさんの輸出する側の思いや関税についての話もあり、話し合ううちに一方的な見方から多面的な見方へと変わっていった。

輸出のメリットを話す子もいる反面、生産者の方々の思いを話し「Kさん(農家)だって、Yさん(漁業協同組合長)だって困るって言っていたよ。やっぱり輸入したら売れなくなるから反対」「JAのKさんも

TPP反対って言うてたよね」と安全面だけでなく、出会った生産者一人一人に思いを馳せる子も多くいた。

今日は今までより難しい。マグロの時は楽しかったけど…もっとインタビューしたい。先生がぼくのことをインタビュー上手やし、いっぱい聞きに行つててすごいって言うてくれたから、頑張る気になった。だから、みんなでスーパーへ行きたい。ぼくの行きつけのスーパーはいつもインタビュー行くから何でも答えてくれる。そのスーパーは紀州野菜のコーナーあるし、有機野菜のGさんが出しているからおすすめ。それに前はYさんの「Y鯖」もあった。

それにJAのKさんの話で、JAの頑張っていることを宣伝したら農家の人もみんなもわかってくれて一石二鳥。(かんと)

輸入しないほうがいい

Kさん(アイガモ農法)がTPP反対って言うてたし、W水産は持続ある漁業に向けて頑張っている。市場のKさんだって困っているっていついた。

しらすのY店や漁協のYさんもだ。今日話した中で心に残ったのは、輸入が安全でないからダメということばかりいうのではなく、生産者の気持ちになったら、消費者は安いとか安全でないということだけでなく、日本の農業や水産業を支えていかなくてはならないこと。和歌山は10%しか畑がないのは驚いたけど小さくても品質のいいものを作るといい。

そのためにぼくは5Cカフェで、和歌山産や国産のよさをいいたい。(はると)

Kさんのことを知りたい

ぼくはクラスで一人だけ「米」のグループに入っている。グループと言っても一人だけど、それはなぜかという、お母さんは食事に気を使っていて、ぼくも無農薬いろんなものを使っているか、口の中に入れたらわかる。だから、アイガモ農法のKさんのところに何度もいかせてもらっている。カモはかわいくてみているだけで、無農薬がいいなと思う。

夏休みにもいろいろ調べたけれど、今度Kさんのところに行って聞き取り調査をする。和歌山には平成7年は農家の人が5248人いたけど、平成22年になると2046人になっていると聞いて心配になってきた。これから、みんなにそのことを伝えたいといけない。(りょうた)

それぞれの立場の人々が、どのような願いをもって働いているか考える子も出てきた。その思いを伝えなくてはならないという使命感から、3名をはじめ、クラス全体が、単元の終末の「発信」に意識が向いていた。これは3年生の時も、防災の学習から、同じように校外の多くの人に発信したという経験があるからこそ、イメージしやすかったのではないだろうか。

4. 単元の考察

4. 1 対話型学習の中で

子どもたちの課題作りの中で出てきた「和歌山の食料生産はこれからどうなっていくのかな？」という、はるとの課題から始めた。農業や水産業は、食料資源の確保や自然環境のかかわりなどの観点から様々な問題を抱えている。和歌山の食料生産の問題を通して、子どもたちは日本全体、あるいは世界とのかかわりからみた食料という点にまで目を向けていくことができるのではないかと考え、本時を設定した。和歌山の食料生産を扱う理由は、一般的にとらえた農業や水産業に関する知識を具体化するためである。現在の社会科は学んだことを覚えるだけでなく、得た知識を具体的な事象にあてはめて活用することが求められている。ここで和歌山の食料生産を扱うことで、現在抱える問題、それに対する取り組みなどを、和歌山の食料生産という具体的な事象にあてはめて活用する場ができる。1学期には、串本町の漁協の組合長Yさんから、串本町の養殖業の水産業が抱える問題と現状も、日本の水産業が抱える問題と同じであるという話を聞いた。子どもたちはそれ以降、常に和歌山と日本を比べながら話し合ってきた。

本時は、意見交換の際、「大丈夫」「変わらない」「心配」の大きく3つに分かれた話し合いを位置づけている。今回、子どもたちの発達の段階や難しい用語、問題がたくさんあるなかで、課題として適切なのか大変悩んだ。そのためにも、教材と向き合い、じっくり自分の考えがもてるようにひとり調べをする時間を保障し、教材とつなぐ支援をした。社会科では一人一人に寄り添う場面が多く、具体性と即時性を持った支援がより必要となってくると考えている。本時ではこれまでの調べ学習が話し合いの中で生かされるような場になるようそれぞれの個をみとり、支援を続けた。

子どもたちはくらしとかかわりがあることをとらえながらも、農業や水産業は大変な仕事であるという一面的な見方や考え方にとどまり、従事する人々に対する恩恵を感じていない。しかし、ひとり学習をすすめていく中で、課題に深く向き合い「今後、和歌山や日本で食料自給率を上げていくために一番やらなくてはいけないことは何だろう」「和歌山や日本、世界の未来や環境、利益のために自分たちの考えを整理しなくてはいけない」ということに目を向け、思いを馳せる子も出てきていた。それらの観点を生かして学習を展開していった。調べた事実を整理して自分の考えの根拠をもたせたり、友達の説明の中で、考えの根拠となっている事実は何かを聞き取らせたりした。

一昨年同様、各自が考えや願いの根拠をもち、今までの学習を振り返りながら授業に臨むことで、課題についていろんな角度から考え、意見交換し、多くの方から得た断片的な知識を概念的・統括的な知識に高め

るための練り合い、高め合いの場になった。また、話し合いで一人一人が自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりする機会を保障するとともに、個の意見を全体に反映しやすくすることで、子どもの見方や考え方がより多面的に確かになるようにした。ひとり学習の時間を十分保障した場合、自分の考えの出したい思いが先行しがちである。しかし、新たな発想や思考を創造し、学び合いを深めることにはなり得ない。互いの考えをしっかりと受け止め、自分の考え方と比較しながら思考を重ね、自らの考えをさらに深めて表現し合うことによって、新しい価値が生み出されると考えている。その中で教師や子どもが問い直したり、呼びかけたりすることで、クラスの中にじっくりと考える場面が出てくるであろう。しっとりとした雰囲気というのは静かに課題に向かっているという授業だけでなく、子どもたちが課題に向かつて悩み、迷い考える姿ではないだろうか。

「夢中や没頭の生まれる対話では、生活経験に基づく実感の言葉と学習内容の世界の抽象的な概念の言葉が行きつ戻りつする中で、理解は深まっていくことが多い。そして自らの学びを振り返り次への見通しを語ることが、明日への学びへの期待、子どもが伸びよう、学ぼうとする次への学習課題を書き言葉として定着させ生み出していく。この言葉の層の往還がない対話は、平坦な話し合いになる。探究とは内なる自己に向かうと同時に新たな世界へと開かれつなげる営みである。」

(2014 秋田) この言葉を念頭において、子どもたちが自分の本当の言葉で語り、夢中になり没頭する授業をめざし、聴き合い深め合えるような支援をしていった。

4. 2 授業記録より

「和歌山の食料生産はこれからどうなっていくのかな」

一部抜粋 りょうた欠席

かんと①産直ってあるやん？産直って消費者と生産者のどっちのためにもなることなんよ。新しい取り組みとしてたくさん増えてきているんよ。生産者も消費者もいい気分になれるんよ。だから、これは新しい農業のやり方なんよ。

ゆずる そうそう、新しい農業や水産業の考えを普及していたら大丈夫になってくると思うんよ。ほかにもN野菜工場もそうやん？この農林水産白書にはスマート農業ってのっているやろ？そういった一つなんよ。それに、大君がいうたように、Y店の「第6次産業」もそう、新しい農業を増やしていったら未来は明るいと思うんやけど、どう思う？

子どもたち(口々に) ええな、大丈夫な気がしてきた。

かの 新しい農業を取り入れていくと大丈夫って話は他にもあって、和歌山じゃないけど、九州の鉄道会社が農業を手伝い始めたんよ。(中略) 愛媛ではミカン農家をするのに会社にして、

(中略) 工夫をしている。そんなふうにみんな
で協力して工夫することが大切なんよ。
子どもたち(口々に) うん。わかるわかる…でもな。
ももか①みんな新しい食料生産の形を言って大丈夫つ
て言うてるけどね、それがみんなじゃないや
ん?多くの生産者は違うと思うんよ。この表
見て。和歌山の食料自給率みたら、全国平均
39%やったやん?でも、和歌山は1年前は
30%、次の年はその10%下の29%。表
から考えられるのはこれからどんどん下が
っていくってことやと思えへん?だから、心配
大丈夫ということもいいけど、みんなで自給
率を上げる工夫を考えようよ。例えば、私は
(中略) 他の産業も協力していくことが大事
やと思うんよ。

子どもたち(口々に) ええな、それ! 考えよう、賛成。
はると そうなんよ。僕もそれに賛成。だってさ、僕
たちがやらなかったら誰がする?人任せに
したらあかんやろ?僕たちからできること
をちょっとずつやってかなあかんのちゃう
ん?僕たちも協力して上げていかなあかん
のよ。ぼくら、5Cだったらできると思うよ。

子どもたち(口々に) うわ! 賛成!

いちみ 私も5Cでやっていったらいいと思うんよ。
まずは参観に近いやん?例えば杉原さんの卵
売らんやったら、餌のこだわりを一緒に発信
するとか、生産者だけでなくいろんな産業も
食料生産に対してやってる工夫、苦勞を伝え
ていくといいんやと思う。

たくや (板書をさし) 前に書いている生産者の工夫や
こだわりを発信したらいい。それに僕たちも
フードアクションワカヤマ宣言作りしたいな。

かんと②みんなさあ、5Cが変えるって言うてるけど、
そのためには、まず、地域の人に知ってもら
ってからだと思う。そう思ってもらってから
いっぱい発信してやった方がいいと思うな。

銀太郎 じゃあさ、もうじき参観で野菜売るやろ。そ
の売れたお金で、前に神山先生いうてた世界
の餓死で死んでいく人のために寄付しようよ。
世界の人口増えているやん。このままやたら
食料減ってくし人増えるやん。だから、今
は年2回しか収穫できないけどN社みたいに
年10回収穫できるような日本の技術を世界
に伝えるようにしたらいいんちがう?

教師 話が壮大になってきたなあ・・・。

翔太 だから、それは世界や日本で考えていくこと、
そんで、ぼくらは、やっぱ、ふるさと和歌山
PRプロジェクトやってるやん。だから和歌
山をPRしていくことが大事なんよ。そしたら
これを続けていかなあかん。自分たちがや
るべきことを続けていくんよ。それをやって

いったらいいと思う。

かんと③あのね、先生に悪いんやけど、言ってもいい?
(教師 うん、いいよ)

かんと 3年のとき、ぼくら防災の勉強したやん?め
っちゃやったやん?でも4年になったら、あ
んなにやる気いっぱいやったのに防災家族
会議とかやってないんよ。結局、翔太君いう
みたいに続けることが大事やと僕は思うん
よ。そうやろ?みんな?だから続けていかな
あかんのちゃう?

ももか②そうやな、続けることと、もう1個は、すぐ
できること、例えばカフェで発信、それに5
Cで発信するのもいいけど、和歌山県の人と
コラボして発信したらいいやん?前にはるか
ちゃん、中2の子がクラスに職業体験できて
くれた時言うてたやん?4年の時、梶本先生
のクラスで和歌山城の勉強して、そこからゆ
るキャラや観光案内所できたって…三年生
のときも防災もそうだったやん?そんなとき
みたいに和歌山の人にフードアクションワ
カヤマ宣言の提案とかコラボとかしたら、も
っと大々的にもできると思うんよ。そしたら、
つながって続いてもいいし、どう?

教師 なるほど、じゃあ、次の授業では、まず、フ
ードアクションワカヤマ宣言を作ることにし
ようね。

本研究の同じ学習手法として、ストーリー性のある
単元計画を行う、魅力的な地域教材と出合わせるこ
をした結果、子どもたちは、ももか、はると、いちみ、
たくや、かんと、銀太郎、翔太など、多くの子ども
たちから食料生産に使命感をもち自分事としてとらえる
発言が出た。これは、一昨年担任した子から、さらに
クラスにつなぎ、広がり、高まった結果であると考え
る。また、かんと③、ももか②のように、2年間にわ
たり同じ学習手法をすることによって自己の気付きが
あった。つまり、自ら振り返り、パーソナルヒストリ
ーを自らつむぐいでいく子が育ってきたのではないかと
考える。

4. 3 みとりと支援

・ひとり学習をつなぐ支援

「ひとり学習」と「全体学習」をつなぐためにグルー
プ学習を多く取り入れた。グループ学習で一人一人の
考えをつないでいくことで、「ひとり学習」が「全体
学習」に、「全体学習」が「ひとり学習」にと相互に
いかされる。いかされるというのは、一方があるから
こそ、もう一方がより深まったり、より広がったりす
ることである。グループ学習の中で雰囲気作りを大切
に話し合うことにより、追究の意欲が高まる場面も見
られるようになって考えた。また、本単元を取り組む
にあたり、家庭の協力は欠かせないと考えた。

給食の残菜が多く、食に対する意識が低い子どもが多くいる。生産に従事する人々の苦労や努力、また、たくさんの人々の思いが込められていることを学ぶことで、子どもたちの食に対する意識を、変えていきたい。そして、これらの学習を通じて、これからの農業や水産業のあり方について、自分自身の生活と結びつけて考え、食料生産の発展、食料自給率や輸入について考えることにより、家庭での食生活を見つめ、食に対する自分なりの意見を持つことができると考える。最終的には学んだことを保護者の方へ発信し、学びを共有することができる場を考えていきたい。

・一人一人への具体的なみとりと支援

子どもたちの書いた作文をまとめたものを、一人一人に渡し、今までの考えを一目で振り返れるようにした。また「何をどのように調べてこのような考えになったのか」や「この個の考えの背景にはどんな生活・学習経験があるのか」ということを意識して子どもの考えをみとり、話し合い活動において意図的につなぐ。そうすることで、考えのずれや視点の違いを関わり合わせることができ「問い」をつくり出すことができると考える。子どもたちは、調べ学習がすすむほど、自分の考えを主張し、友だちの考えや視点の違いを受けとめられないことが多い。そこで、その違いについて板書で工夫して示したり、問い返して確認したりする。そうすることが、学びをデザインする子をつくるみとりと支援となると考えている。

・評価を学習のバネに

一人一人が学びのプロセスや活動状況、振り返りカードをファイリングするようにし、子ども自身が学習の計画を立てたり、自分の学びを確かめたり、観点別に自己評価を行ったりするようにした。そこで、教師の観察やペーパーテストだけでは、とらえられない子どもの内面的な成長や変容を探ることができると考えたからである。また、ワークシートやノートでの対話、学びの途中の記録、発言、やりとりの中から個に応じた支援を続け、それらを通して学習意欲を喚起できるようにすることが次へのステップになると考えた。

5. 成果と課題

本実践の中からは、ひとり学習の時間を十分保障した分、自分の考えの出したい思いが先行しがちなところも見られた。それだけでは、新たな発想や思考を創造し、学びをデザインする子どもたちの姿がうまれることにはあり得ない。互いの考えをしっかりと受け止め、自分の考え方と比較しながら思考を重ね、自らの考えをさらに深めて表現しあうことによって、新しい価値が生み出されると考えている。そのためにも、教師の「問い直し」や「ゆさぶり」など多くのみとりや支援を大切にしていきたい。また、使命感についても、現実性や有効性の面からの練り上げが不十分であった。「同じ学び方をする」ことで、一過性ではなく、学ぶこ

との原点に立ち返ることができた。それは、学年や発達の段階だけでなく、繰り返すことで応用力が付き、気付きがうまれた。

また、その気付きは同じ学び方をしていない子どもまで広がり、学びに向かうことができた。また、それ

- ① 経験を繰り返すことによって自己の気付きを実感させること。

- ② ストーリー性のある単元計画を行うこと。

- ③ 魅力的な地域教材と出合わせる。

上記3点から得られる学びの形が「自己の気付きをうむこと」であり、これらのことを促す学習手法を推進していくことで、本研究での目指すパーソナルヒストリーを自らつむぐしていく子の姿に近づけたのではないかと考える。子どもたちは、多くの人に食料生産の課題を伝えたいという思いで、地域と人とともに学びを深めた。特に家の人や地域の人の意識を変えたいという「使命感」をもったことがきっかけとなり、地域を身近に感じ、まちづくりの一員としての思いをもち、パーソナルヒストリーをつむいでいった。よって、自己の気付きを促す学習手法には、子どもの学びに対して大きなものをもたらすといえるだろう。

本研究の課題として、今回は2年間にわたり検証することができたが、今後も同じ学年の子を担任するという条件で検証していくのは難しい。そこで、今後の指導にいかせるよう、短い期間で1年間に3度行う、学年の違う先生と同じ手法で学びの効果をみていくことも考えられる。つまり、学びの因果関係の検証をさらに進めることが必要だろう。それによって、より効果的、実践的な“学び方”がうまれるのではないだろうか。

参考文献 文部科学省(2008)「小学校学習指導要領」
安野功(2006)「社会科授業力向上5つの戦略」
東洋館出版社

(2011) 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 35

(2012) 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 36

(2013) 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 37

(2014) 和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 38